

与謝野晶子（1878—1942）

宮原 ソニア

「君死にたまふことなかれ」は与謝野晶子が戦争に行かせられた弟のことを心配して書いた詩である。この詩は五つの部分に分かれていて、両親に大事に育てられた弟のこと、それに結婚したばかりなのに夫と離された妻の悲しみなどが始めに書いてある。

晶子は弟に戦争で死んではいけないと言っている。晶子が天皇は不公平だと思っていることも詩を読んで分かる。天皇は自分自身は戦に行っていないのに、国の人々は戦争に行かせて死んでもかまわないのずるいに違いない。

大町桂月という当時の知識人はこの詩は国家観を発表しているのもであぶない思想を示していると晶子を非難した。しかし、この詩は晶子が反戦のために書いたのではなく、自分の気持ちを示すために書いたのである。

晶子は五万首の歌を詠み、よく知られる歌人になった。日本の和歌の規則通りの形式を使って詩を書いていたが、自然の美しさのことだけでなく、人間の気持ちや感情などの詩を多く書いた。結婚した後、子供が12人も出来て、晶子は生活のためにも歌を詠んだり、小説を書いたりもした。

清水や祇園をよぎる桜月夜今宵__う人みなうつくしき。この歌では桜の花が月の光に照らされた美しさ、そしてその桜の花の上に歩いている人たちもきれいに

見えていることを発表してある。晶子の歌には人間の感情をあらわし示してあり、どの時代の人にも分かることが書いてあるので今でも晶子の歌を読む人はたくさんいる。